秋の花が彩る キャンプ場周辺

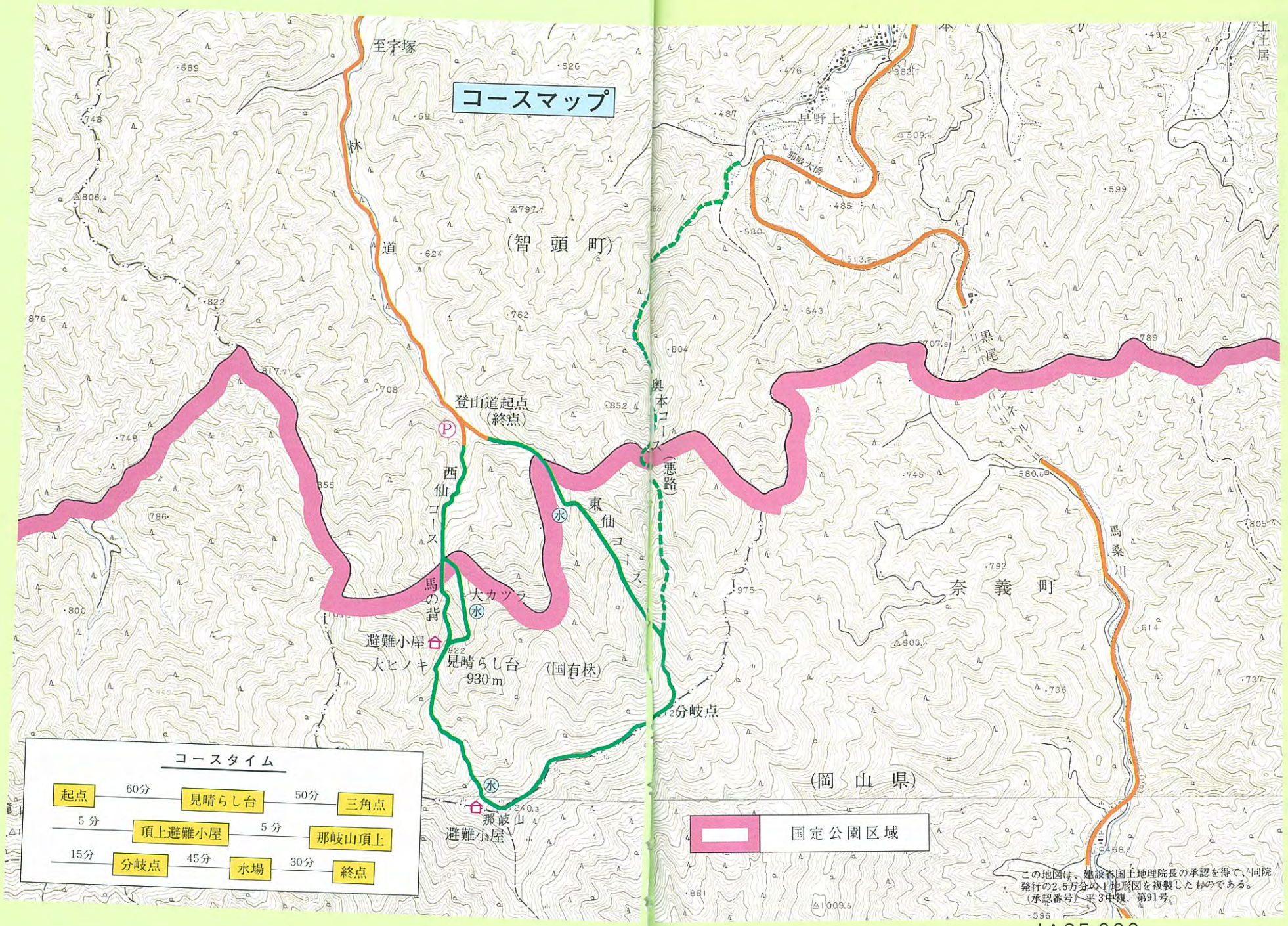
キャンプ場の周辺は高原になっていて、ススキの穂も出そろい、ツリガネニンジン、キンミズヒキ、ハギ、シオガマギク、オミナエシなど、高原を彩る秋の花がオンパレードといったところ。

登山道はキャンプ場までで、そこから先は舗装された道が町道に面した氷ノ山管理センターまで続いている。この管理センターがこのコースの終点である。

那岐山登山コース

那岐山(1,240 m)は、鳥取県東部の最南端に位置し、氷ノ山後山那岐山国定公園に指定されています。

中国山地の中でも孤立峰的な形をした山なので、展望が良く、ドウダンツツジなどの植生も特徴的で、日帰り登山・自然観察コースとしてすばらしいところです。



この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2.5万分の1地形図を複製したものである。
(承認番号) 平3中複、第91号

植　物

●那岐山と植物景観●

那岐山遠望（智頭町奥本より）

那岐山は鳥取県東部にそびえている1,240ｍの山です。

鳥取県西部の大山にくらべて、登山者の数は少いとはいえ、それとはちがった植生や特徴があり、学術上たいせつな山です。

那岐山へ登るには、ＪＲ因美線の那岐駅で下車し、宇塚行きのバスに乗りかえ、終点の宇塚で下車します。

そこから登山道の入口まで、約3kmの林道を歩きます。自家用車だと、入口近くまで乗り入れることが可能です。

●那岐山の登山コース●

那岐山へ登る道は二つあります。登山道の起点（分岐点）から山に向かって右側が「西仙コース」、左側の道が「東仙コース」です。

このあたりの標高はおよそ620ｍですから、山頂までのちょうど半分です。

西仙、東仙コースとも山頂までの距離は大体同じで、所要時間は2時間くらいです。

渓流の音を聞きながら、水の豊かな西仙コースを登り、頂上からは、稜線の尾根を経由して東仙コースを下りてくるのが普通です。

登山道起点

●登山道に見られる植物景観●

那岐山へ登る楽しみのひとつは、いろいろな植物と出会えることです。とりわけ、初夏から夏にかけては、花をつけている植物がたくさんあります。

初夏はアジサイの季節です。渓流に沿った林の中には、3～4枚の飾り花をつけたヤマアジサイが紫色の花をつけ、幽玄な感じがします。

それらにまじって、タマアジサイ、コアジサイなど、同じ仲間の植物が同時に観賞できます。

まるで舌を出しているような飾り花は、虫を集める役目をしています。

林業用の作業道が終るあたりが標高730ｍ、それから先は山道が続きます。そして、氷ノ山 後山那岐山国定公園の区域内に入っていきます。

ヤマアジサイ

西仙コースはこのあたりで道が二つに分かれます。すなわち、左手が渓流コース、右手の山道が馬の背コース、どちらも途中で合流します。渓流コースで印象的なのは、カツラやトチの大木に遭遇することです。直径が1ｍ以上もあるカツラを見上げながら、流れに手をつけたり、汗を拭いたりして小休憩をとります。

ギンリョウソウ

●林の下に見られる植物●

初夏のころ、針葉樹の下にはゆり科のマイズルソウが白い花を穂状につけて咲いています。

また、葉の形が小さなうちわに似たイワウチワが、つやのある常緑の葉をつけて群生しています。

花は早春の3～4月頃ですが、果実をつけることはほとんどありません。

岩上に目を移すと、ホンシャクナゲが紅紫のみごとな花をつける

のも初夏のころ。花びらの先が七つに分かれているのが分類のポイント。ややうす暗い森林の下には、葉緑素がなく、菌を養分として育つ銀色のギンリョウソウやシャクジョウソウの姿も見られます。

●頂上に近い自然低木帯●

那岐山といえばドウダンツツジを連想するほどたくさん自生しています。

初夏から夏にかけては、淡紅色で紅色の筋があるサラサドウダンの花ざかり。とりわけ美しいのがベニドウダンです。

ドウダンツツジは、昭和46年に智頭町の花に指定されています。

サラサドウダン

自然低木林の中では、そのほかタンナサワフタギ、ノリウツギ、ハイイヌツゲ、マルバマンサク、ナナカマド、ニシキウツギなどが自生しています。

●那岐山頂上や稜線付近●

お花畑が広がっているのが1,200mあたりで、そこから三角点や避難小屋を経て頂上への道がひらけています。

ベニドウダン

山頂付近はササが一面に生え、その中に、ヨツバヒヨドリ、ショウジョウスゲ、オオバギボウシ、などの植物が混生しています。

寒地性の植物もあり、その代表的なものにホソバノヤマハハコ、イワキンバイ、アカモノ（アカモモ）などが目につきます。

風あたりは強いが、冬の積雪は少ないという特異な気候も那岐山の植生に大きな影響を与えているものと思われます。

ナナカマド

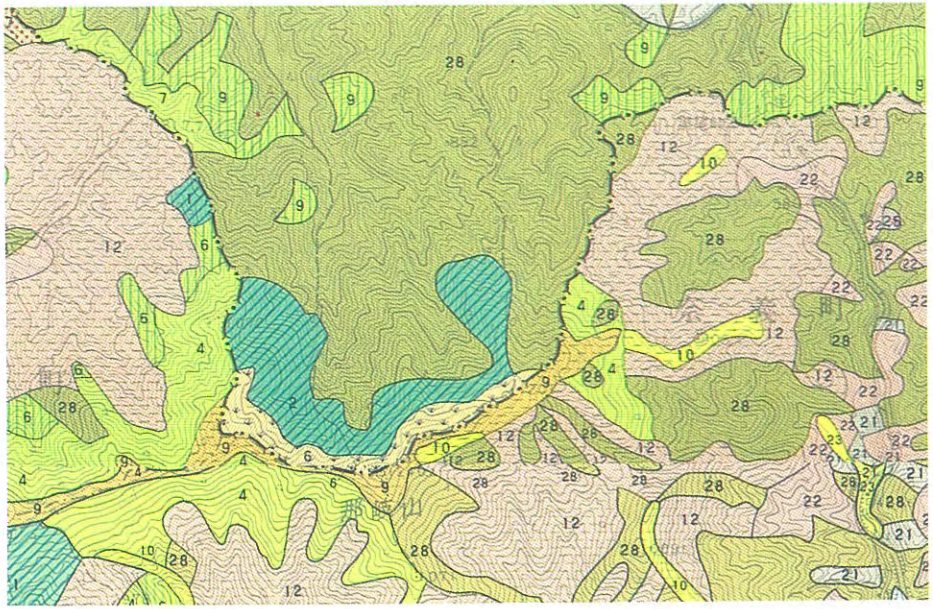
山頂から東仙コースへの稜線を歩くと、ベニウツギやヤマヤナギ、イワツツジにまじって、貴重な植物の一つになっているバイケイソウも見つかります。

アカモノ（アカモモ）

大山では、標高1,400mくらいまでは、ブナ、ミズナラが自生していますが、那岐山ではそのような高木はなく、ヒゲノガリヤスの草原が広がり、低木帯が続いていることも那岐山の特色です。

頂上の草原

植　生　図



《凡　例》

ブナクラス域自然植生
- クロモジ－ブナ群集
- 自然草原

ブナクラス域代償植生
- ブナ－ミズナラ群落
- クリ－ミズナラ群落
- タラノキ－クマイチゴ群落（伐跡）

ヤブツバキクラス域自然植生
- コナラ群落

植林地、耕作地植生
- スギ・ヒノキ植林

動　物

●那岐山の動物概要●

那岐山は、山ふところが広くて、深く刻まれた地形や地質の多様性に富み、動物たちが生息するには適しているように見えますが、よく見てみると、山麓から中腹にかけてほとんどと言って良いくらいヒノキやスギの人工林でおおわれています。

そのために、哺乳類や鳥類をはじめとする動物にとっては、餌となる木の実が少なかったり、寝ぐらとなるすみ家に適していないために、一般に種類数や個体数が多くはありません。

しかしながら、昆虫類に限って言えば、山頂域で発生し生活する種類は少ないものの、山全体が大きくて独立峰的な性格が強いために、上昇気流に乗って集まってきている姿がよく目にふれます。

気流によってとは言うものの、まったく他動的に吹き上げられるのではなくて、習性の上で山頂部をめざす傾向のある種類が、気流を利用しているというケースが多いと思われます。

ミヤマカワトンボ

那岐山は全体の植生上から見て、必ずしも昆虫類の種類に恵まれているとは言えませんが、スギ林、ミズナラ林、低木林、ササ原などの植物群落も点在し、登山道も整備されているために、昆虫の垂直的な分布や生態学的な研究を行うには大変適した山であると言えましょう。

アオスジアゲハ

●那岐山登山道の周辺●

登山道入口となる河津原より智頭スギの林立する林道をすすみ、馬の背や見晴らし台を経由して頂上をめざす西仙コースを歩きはじめると土師川の渓流のせせらぎの音がよく聞こえてくるようになります。

この付近の渓流では、黒褐色をしたカワガラスが川床低く石から石へと飛ぶ姿や、ミソサザイが「ピーチョコチリチクピリ　ピーチョ…」などと盛んにさえずっています。

ミソサザイ

日当りの良い林道では、ミヤマカラスアゲハが水飲み場を見つけては群をなしている姿に接したりします。日陰ではヒカゲチョウの仲間が見られ、高度が増すにつれて多くなるのがヒメキマダラヒカゲという種類です。

また、昼行性のガでその飛び方や翅型から一般にチョウとよくまちがえられる橙色の紋をもったイカリモンガが飛んでいるのをよく見かけます。

ミヤマカワトンボも渓流中の石の上によく止まっており、個体によって翅の色彩が異なり、出現変異の研究もできます。

智頭町にはセミの仲間が11種類知られていますが、那岐山の山麓から頂上へかけてすむ数種類を紹介します。

高津原付近のアカマツのある雑木林には、チッチゼミがセミと思えない声で「チッチッチッ…」と秋頃まで鳴いています。中腹の植林地では、ヒグラシが早朝と夕方に大合唱をします。

ブナ帯と深い関係をもつ山頂に近い標高 900 m 位までのところには、聞きなれない「ギョーキー・ギョーキー…」の前奏で始まり、「ゲゲゲゲ…」と鳴くヒグラシに似たエゾハルゼミがいます。

エゾハルゼミ

また、稜線付近には「ジー…」と鳴くコエゾゼミがおり、鳴いている時にポンと木を叩いてやるとびっくりして墜落する習性を持っています。

その他、標高400～900 mにかけてエゾゼミが、頂上近くのミズナラ林にはニイニイゼミも見られま

す。

●山頂部の昆虫類●

山頂に集まってくる昆虫の種類は、どこの山でも同じようなものが見られますが、これは前述した上昇気流に乗る習性を持つものが多いためです。

よく知られたものとしては、熱帯地方に分布するマダラチョウ科に属し、この仲間では最も北方まで分布しているアサギマダラが見られます。これは、淡青色と茶色のつやのある鮮やかな色彩が美しく、また大形であるために、飛んでいればすぐに分ります。

他に、キアゲハ・アゲハ・ミヤマカラスアゲハ・ヒオドシチョウ・ツマグロヒョウモン・ヒメアカタテハ・オオミドリシジミなどがあります。

盛夏から夏の終りにかけては、アキアカネ・ナツアカネなどのアカトンボの大群が山頂に集まっています。

これはアカトンボ類の著しい習性であって、羽化したての個体は障害物がなくて集まりやすい高い山の頂上部で群集して夏を過ごし、秋になって産卵のために山麓へと下って行くのです。

山頂部のミズナラ、ウリハダカエデ、サラサドウダン、リョウブなどの低木付近には、ジョウカイボン・ハナカミキリ類が飛び交い、草原地帯では、ヒナバッタ類が「ギシギシ」と鳴いているのがよく聞かれます。

アサギマダラ

ミヤマカラスアゲハ

アキアカネ

地形・地質

●地形について●

那岐山は鳥取市の南方約38kmの因幡では最南端にある標高1,240mの古い火山です。中国山地の一つではあっても、独立峰としての特徴を持っています。また、火山ですが大山や扇ノ山に比べると形成期は1～2ケタも古く、火口はもちろん今の山体そのものも原形ではありません。永い年月の間に浸食され現在の姿に形づくられてしまったのです。

那岐山は、千代川の支流である土師川水系の南端で、土師川の源流（大畑谷）となっています。智頭町から国道53号線に沿って小起伏の山地に囲まれた谷底平野を南下しますと、土師付近までは所々に河岸の砂礫台地（段丘地形）が見られます。黒尾峠にさしかかる栃本で国道から分かれ、宇塚への道に入っても河津原までは地形的に大きな変化はありません。河津原から登山道入口までの約3kmは大畑林道で、次第に渓谷の様子を濃くしています。

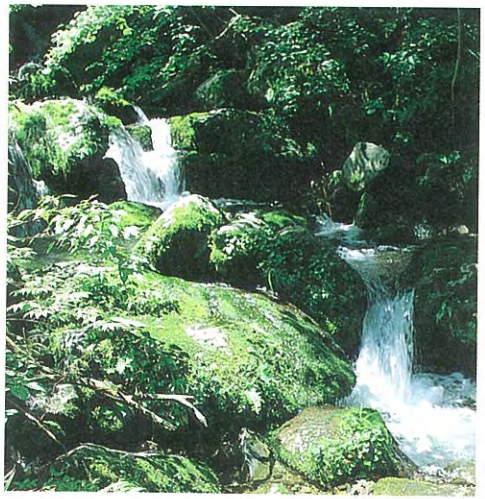
那岐山北麓は登山道に入ってから壮年期末期の地形をあらわしてきます。なだらかな尾根すじを登りつめた山頂での眺望は晴天ならばすばらしいものです。南麓は起伏の少ない急崖で、斜面の下に津山盆地の延長である日本原台地が広がります。北麓の鳥取県側が細かな谷すじを幾すじも刻んだ渓谷であるのと好対象な地形はまさに絶景といえます。

頂上付近から日本原台地を望む

●地質について●

那岐山付近の地質は智頭町西南部地質図として示しています。鳥取市から那岐山のふもとまでは国道53号を南下するルートです。鳥取平野の周辺から河原町までは新第三紀中新世の地層と鮮新世火山活動による丘陵やその山々が見られます。河原町南部の一部に県内最古の三郡変成岩類が見られますが、用瀬町に入った国道沿いは花崗岩地帯になり、千代川の川床には花崗岩が現われています。智頭町に入っても国道沿いはほとんど花崗岩地帯が続きます。一口に花崗岩と言っても大規模なマグマの

貫入が長い時間をかけて幾度も起ったものでその種類は多様です。おおまかに言って中生代末の白亜紀後期から新生代前期の古第三紀にわたる期間を要して西南日本の地下深くで大規模に形成されたものが現在地表にあらわれているのです。分析の結果、智頭花崗岩の方が用瀬花崗岩よりも古いとされています。



花崗岩の渓谷(西仙コース)

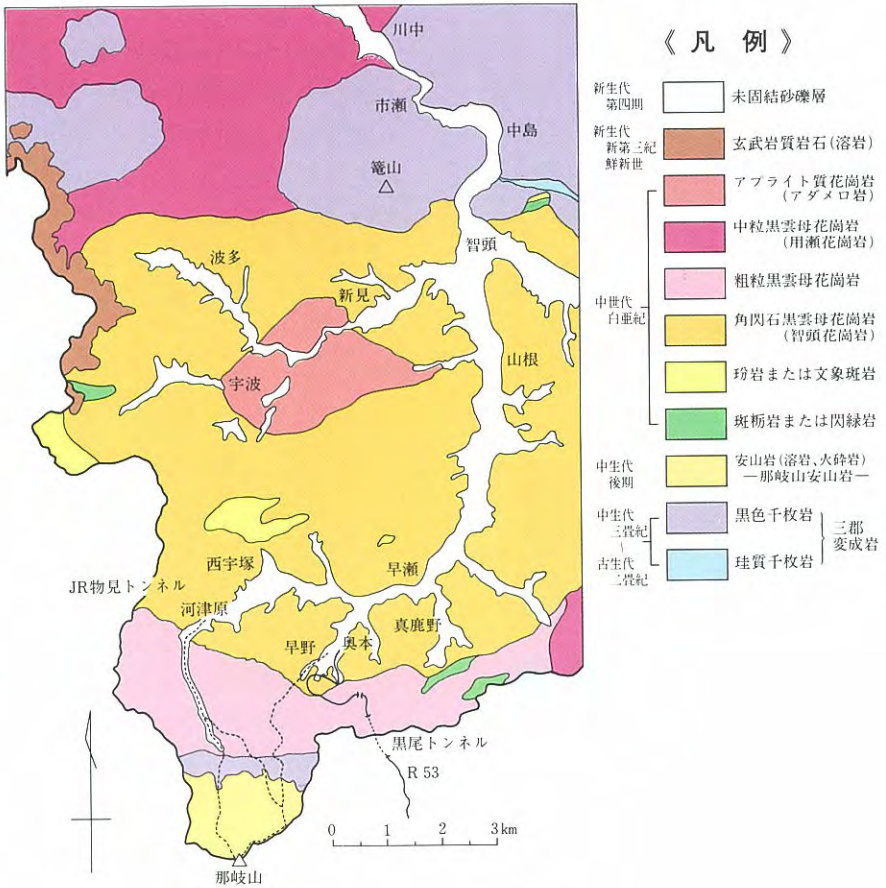
さて、那岐山は見かけ上このような花崗岩を基盤にしている山なのですが、渓谷に沿って沢や周辺の岩石を注意深く観察していきますと大まかに三層の構造になっていることに気付きます。たとえば、模式的に考えた場合、三色に色づけした餅を重ねて山の形に切ったと考えると理解しやすいでしょう。今から2億数千万年前の海の地層が現在の三郡変成岩類の地層となりました。これが日本列島の基盤の一つなのですが、その後幾度も著しい地殻変動があり古い日本列島が生まれます。

山頂付近の安山岩

さらに中生代末頃に激しい火山活動が各地に生じました。その一つが那岐山の噴火でもありました。三郡変成岩の上を噴出物がおおったのです。安山岩・火砕岩・溶結凝灰岩などが幾重にも積っています。その後、前述の花崗岩類が貫入し、見かけは基盤を成しているというわけです。那岐山の三郡変成岩類や安山岩類は、この花崗岩類の貫入によって部分的に熱変成作用を受けています。これは重要な構造理解の証拠なのです。

登山の前半は沢登りです。川床には色々な岩石が見られますので前述の内容を念頭におき、何種類の岩石があるか拾って調べると楽しいと思います。注意して観察すると15種類ほどになります。

智頭町西南部地質図



人　文

●那岐大明神とその周辺●

那岐山は遠い神代の昔から、神さまのみたまが宿る「神の山」として崇敬されてきました。

山頂近くにある大岩の側面には、天照皇大神・伊佐那岐命と彫りきざまれ、神の岩としてシンボルにされています。

これは、1849年（嘉永２年）に美作国に住んでいた人が、この巨岩に彫刻したものであると語り伝えられています。

140年以上たった今でも、はっきりと読みとることができます。

「那岐山」という山の名前も、伊佐那岐・伊佐那美の名にちなんで命名されています。

「伊佐奈岐命」の文字が彫られている頂上付近の岩

那岐山のふもとには、たくさんの古墳や大むかしの集落の跡が発見されています。

伝説も数多くあり、とりわけ馬に積んでいた荷物もろとも両腕で支え持ち上げたという怪力男の民話は今も語り伝えられています。

また、智頭に近い「三田」というところには、源義経（みなもとのよしつね）に仕えていた武蔵坊弁慶（むさしぼうべんけい）のお母さんの墓と伝えられる古い五輪も残っています。

このように、那岐山の周辺にはまだまだ多くの史蹟が眠っているのです。

NATURE LAND 自然探訪

那岐山登山コース

登山紀行（７月上旬）

鳥取県東部で一番懐の深い山、それは智頭町の最南端に位置する「那岐山」である。アプローチが長いため登山者の少ない山だが、周回コースが整備され、徐々にこの山のファンが増えているようだ。

交通機関は、ＪＲ因美線で鳥取県最後の駅「那岐」で列車を降り、宇塚行きのバスに乗り換え、終点で降りる。ここから登山道入り口まで林道を約３㌔歩く。車なら入り口まで行ける。

神秘の美しさのヤマアジサイ

林道の舗装が切れたところが分岐点になっていて、ここが登山道の起点。右手の道が西仙コース、左が東仙コースで、どちらから登っても帰路はここで合流する。お勧めメニューは、登り道が変化に富んでいる右手の西仙コースである。ここの標高が620㍍なので、頂上（1,240㍍）までちょうど半分の高度を登ることになる。

西仙コースに入ってしばらくは林業用の作業道を歩くが、一帯は素晴らしい杉の美林となっており、杉の町「智頭」が実感できる。渓流に沿った道路の両側は一面ヤマアジサイが花盛り。薄暗い林のなかで、青でもない、紫でもない、神秘の色が、少し蛍光がかったような美しさで輝いている。

作業道が終わり、いよいよ山道となるが、ここから氷ノ山　後山那岐山国定公園の区域に入る。

なお、道端にイラクサがたくさん生えていて、触れるとアリにかまれたようにいたいので要注意。

山道に入ってすぐに道が二手に分かれている。右手が尾根コース、左手が渓谷コースで、どちらも上

▲イラクサ

部の馬の背避難小屋で合流する。

夏は左手の涼しい渓流コースのものだ。この沢の水はとても冷たく、まさに天然クーラーといったところ。渓流沿いの歩道を冷気が覆っている。この沢にはミソサザイが多く、ピーチョコチリチクピリ　ピーチョ…などと盛んにさえずっている。また、谷筋を生育地としている黄色いサワギクの花も点々と見られる。

渓流に君臨するカツラの大木

何回か沢を渡りながら登ると、やがて、直径2㍍はあるカツラの大木に出合う。何百年とこの渓流に君臨している主であろうか。この大カツラのすぐ上が最後の沢渡りで、登りの水場はここを過ぎると頂上近くまでない。

これより渓流に別れを告げて馬の背と呼ばれる尾根伝いの急坂となる。坂の途中標高900㍍辺りからブナの木が現れる。馬の背を上りきったところが「見晴らし台」と呼ばれる展望の良い高台で、ここには木造の立派な避難小屋があって、地元の人によってきれいに管理されている。周辺はシャクナゲの群落。また、小屋の西側には直径1.5㍍はあると思われるヒノキの巨木があって一見に値する。

小屋を出て尾根道を登って行くと、やがて胸突き八丁の急な坂にぶつかるが、つい最近地元の人の手で新しい鎖が取り付けられているので、この鎖につかまりながら登る。それほど危険ではないが、何せえらい急だ。

ここを登りきり、標高1,000㍍の標識がある辺りからこう配は緩やかになり、足取りが軽くなる。ブナ、ミズナラの混交林も次第に丈が低くなり、1,100㍍辺りから潅（かん）木帯になる。潅木帯は智頭ドウダンで有名なサラサドウダンやホツツジ、アセビ、ネジキなどのツツジ科の低木類に、ミネカエデ、ウリハダカエデ、ナナカマド、リョウブなどが交じっている。なかでも今の時期はネジキの白い花が満開で、ホツツジもつぼみをいっぱいに膨らませている。登山道と低木林との間の草むらに

避難小屋付近のヒノキ巨木

は、淡いピンク色をした大輪のササユリやヨツバヒヨドリ、オトギリソウの花が今とても美しい。

標高1,200㍍を過ぎると一面のササ原。そして間もなく三角点のある岡山県との県境稜（りょう）線に出る。一挙に南北の展望が開く。すぐ東側には頂上も見える。県境伝いに少し下ると避難小屋がある。天候が悪ければここで昼食にしたほうがよいが、天候が良ければ、もうひと踏んばりすれば那岐山頂はすぐそこだ。登山口を出てゆっくり登っても2時間で頂上に立つ。

360度のパノラマ開ける別天地

ここは360度のパノラマが開けた別天地。北に日本海、視界が良ければ遠く大山まで、そしてすぐそこに氷ノ山も望まれる。南には日本原台地や津山盆地が広がっている。素晴らしい！　汗した者だけに与えられる感慨だ。

ゆっくり休憩し、頂上の自然を満喫したら、下山だ。帰路はなだらかな県境を東の方に下って行く。すると、約15分程で東仙コースの分岐点にぶつかる。ここから右側が、岡山県側の菩提寺へ下るコース、左側が出発点へ戻る東仙コース。

東仙コースに入ってしまえば道は良く整備されていて、丸太階段がどこまでも続く。ヒノキの造林地を過ぎ、シデ林を抜け、どんどん下って行くと、中間あたりで国有林の林道を横切る。さらに階段を下ると、やがて左手の方で沢水の音が聞こえ、水場に出る。水場を過ぎたら少し登り、そして、最後の急坂を下りきったところが林道で、あとはこの林道を右手に下れば10分程で出発点に戻る。

▼オトギリソウ

打吹山登山コース

打吹山(204m）は、倉吉市街地の背後にひかえている孤立峰で、おわんを伏せたように美しい姿はどこからでも眺められ、倉吉市のシンボルになっています。

ここは、サクラやツツジの名所として知られているだけでなく、もう一歩踏み込んでみると、打吹城の城跡や長谷寺などの史跡、また、「森林浴の森」百選にも選ばれた県下最大のシイ・タブ林（常緑照葉樹林）とその中に生息しているたくさんの野鳥・昆虫など、自然観察のメニューが一杯です。